市原市菊間岡田家、北野地区

市原市中央図書館 寄贈
①北野地区卯の日祭り祭具一式
②岡田家掛け軸、水野家拝領三方

記録書

平成２７年３月

八幡史学館名所100選チーム
市原の古文書研究会

市教図第１４８８号
平成２８年２月５日

長谷川　重徳　様

市原市立中央図書館長
（公印省略）

寄贈資料について（お礼）

残寒の候、益々御健勝のこととお喜び申し上げます。

このたびは、別紙受贈資料一覧「菊間地区における三山信仰に係る富士講に関する資料」の御寄贈を賜り、誠にありがとうございます。

中央図書館では、市原市に関する資料は書籍、雑誌等に限定することなく可能な限り収集し市民に提供していきたいと考えておりますが、現在は資料提供方法や施設設備方法等について調査・研究を重ねている段階であります。

貴重な資料をお預かりしていながら、お礼を申し上げるのが大変遅くなり申し訳ありませんでした。

今後とも中央図書館を利用していただくとともに、市原市に関する資料・情報などがありましたら、お知らせいただければ幸いです。

【上記に関する問合先】
市原市教育委員会　生涯学習部
中央図書館　整理係　高浦
電話　０４３６－２３－４９４６
E-mail:toshokan@city.ichihara.chiba.jp

市原市教育委員会
生涯学習部　中央図書館
館長補佐　田　所　　真
〒290-0050 千葉県市原市更級５丁目１番地51
TEL　0436-23-4946
FAX　0436-24-7777
E-mail m-tadokoro14@city.ichihara.chiba.jp

市原市教育委員会　生涯学習部
中央図書館　整理係
係長　髙　浦　正　敏
〒290-0050 千葉県市原市更級5丁目1番地51
Tel 0436-23-4946　Fax0436-24-7777
toshokan@city.ichihara.chiba.jp

3月20日 10:00～11:30

長谷川正
馬込（旧姓岡田）

市原の古文書研究会
山岸ノ内
佐野 彦

引渡し
受取り → 移動 → 活用
収次

① 卯の日祭り祭具一式 → 別紙
明細　　調査報告書参照

② 岡田家 掛け軸・三方 → 市制50周年
八幡宮式典65周年記念
行事 関連報告書参照

↓

岡田家 掛け軸 復元について 参照
水野忠邦

「若宮八幡宮」は菊間八幡宮の意
若宮八幡神社所有文書に関連資料あり（検地帳）

２－３　紙本軸装文書（附残欠）　１幅
・紙幅 290 ㎜、紙長不詳（軸装全幅 400 ㎜、全長不詳）
・料紙　不詳
・裏書　なし
・資料分類　郷土資料（修験信仰歴史資料）
・その他　箱なし
表具　残存（劣化）　２－４、２－５と同一表具
表装替　要（修復可）

２－４　紙本軸装「小御岳　石尊　大権現」版刷　１幅
・紙幅 275 ㎜、紙長 590 ㎜（軸装全幅 360 ㎜、全長 620 ㎜）
・料紙　不詳
・裏書　なし
・資料分類　郷土資料（修験信仰歴史資料）版刷　落印
富士参詣印「富士口爾」
・その他　箱なし
表具　残存（劣化）　２－３、２－５と同一表具
表装替　要（落書きあり　修復可）

２－５　紙本軸装「庚申」版刷　１幅
・紙幅 275 ㎜、紙長 560 ㎜（軸装全幅 347 ㎜、全長 840 ㎜）
・料紙　不詳
・裏書　なし
・資料分類　郷土資料（修験信仰歴史資料）版刷
富士参詣印「富士口爾」
・その他　箱なし
表具　残存（劣化）　２－３、２－４と同一表具
表装替　要（落書きあり　修復可）

所　見

「１」旧岡田家所蔵資料は、慶応三年十月の大政奉還により沼津から転封となった菊間藩水野家のハレ席を飾った掛軸と三方であり、市原市の幕末から明治初頭期の菊間地域を知る重要な歴史資料と評価できる。市制施行関連資料として所蔵し年頭等の年中行事紹介などで展示活用するとともに、郷土史研究等への情報提供に資することができる。

「２」修験信仰資料（富士講）は、菊間地区に伝承されてきた富士講の存在を具体的に示す一括の歴史資料である。市内富士講については、五井に富士吉田「富士浅間神社本宮」の御師外山家が招来され講を形成したことが明らかであり、その分布は飯香岡八幡宮境内や五井大宮神社境内の浅間塚などにより臨海部にはじまり、内陸部では平蔵まで広く認められている。しかし、富士講で用いられる掛軸等の歴史資料については、講の断絶とともに炊上げによって焼却されることが多く、古資料の伝存が行われてこなかった。このことから、本資料群は、一括して貴重な歴史資料である。但し、一部に劣化の激しいものが認められる。将来的には表装替などによる修復が必要であり、現状では修復可能な状態である。

受贈資料一覧

１　資料概要
「１」　旧岡田家所蔵資料　　員数　２
「２」　修験信仰資料　　員数　５

２　名称ならびに法量等
「１」　旧岡田家所蔵資料
１－１　羽州四品（源忠義書）紙本軸装「鶴」　１幅
・紙幅 558 ㎜、紙長 1,320 ㎜（軸装全幅 690 ㎜、全長 1,930 ㎜）
・料紙　不詳
・裏書　「千葉県市原市菊間二五八六　岡田昭男　所有」
・資料分類　郷土資料（年中行事歴史資料）
・その他　紙箱付（法量　64 ㎜×64 ㎜×815 ㎜）

１－２　漆塗　家紋付三方　１点
・全高 183 ㎜、脚高 150 ㎜、盤高 33 ㎜
全幅 210 ㎜、脚幅 141 ㎜　（方形隅落八角）
・材質　木製（針葉樹正目材）、全面朱漆塗、金泥縁塗
・特徴
盤側面正面　家紋「丸二立澤潟」紋　（水野澤潟紋亜種か）
脚部正面ならびに側面　宝珠形刳り貫き（金泥縁取り）
・資料分類　郷土資料（年中行事歴史民俗資料）民具
・その他　「立澤潟」は古式紋帳に「オモガタ」と訓じられる。
近年「沢潟」（オモダカ）と訓じられる。

「２」　修験信仰資料（富士講）
２－１　紙本軸装「彩色仏画」　１幅
・紙幅 242 ㎜、紙長 621 ㎜（軸装全幅 354 ㎜、全長 1,300 ㎜）
・料紙　不詳
・裏書　なし
・資料分類　郷土資料（修験信仰歴史資料）仏画
・その他　箱なし
表具　残存（一部劣化）
２－２資料と表具一対か
表装替　不要
仏画　浅間大菩薩の本地佛である「大日如来」坐形

２－２　紙本軸装「若宮八幡宮」　１幅
・紙幅 244 ㎜、紙長 620 ㎜（軸装全幅 341 ㎜、全長 1,320 ㎜）
・料紙　不詳
・裏書　なし
・資料分類　郷土資料（修験信仰歴史資料）御正躰
・その他　箱なし
表具　残存（一部劣化）　２－１資料と表具一対か
表装替　不要

与えられることになると思ったので切りつけたと供述したが、実際にはそのような事実は無く、乱心したとされ忠恒はその罪で改易となり、川越藩に預けられた後、叔父の水野忠穀の江戸浜町の屋敷に蟄居し、そこで没した。同年8月27日、忠穀に信濃国佐久郡内に7000石が与えられて家名は存続している。忠穀の嫡男・水野忠友の代に大名に返り咲いている。

水野 忠友は、江戸時代中期の旗本、のち大名、老中。三河国大浜藩主、駿河国沼津藩初代藩主。沼津藩水野家8代。

享保16年（1731年）2月3日、大身旗本水野忠穀の長男として生まれる。水野家は元々信濃松本で7万石を食んでいたが、水野忠恒（忠友の従兄にあたる）が刃傷事件を起こして改易され、家督は忠恒の叔父・忠穀に相続は許されたものの、大名の身分を剥奪され、信濃佐久郡7000石の旗本として辛うじて名跡を保っていた。

忠友は父死去に伴い12歳で家督を相続し、家治小姓（元文4年（1739年））、小姓組番頭格（宝暦8年（1758年））、御側衆（宝暦10年（1760年））を経て、若年寄となり、明和2年（1765年）に加増を受け都合1万3000石になり、三河大浜に城地を与えられ、再び大名に復活する。更に駿河沼津に移り、最終的に3万石となる。

幕府では一貫して田沼意次の重商主義政策を支え、若年寄、側用人、勝手掛老中格を経て、正式な老中になる。天明6年（1786年）、意次失脚と同時に、忠徳と名乗らせ養嗣子としていた意次の息子（のちの田沼意正）を廃嫡とし、かわりに分家旗本の水野忠成（大和守）を養嗣子としたが、遅きに失した感は否めず、松平定信の指令で免職の憂き目にあう。

10年後の寛政9年（1797年）に再び老中（西丸付）に返り咲き、在職中の享和2年（1802年）9月19日に死去した。跡を養嗣子の忠成（ただあきら）が継いだ。

水野家は忠友・忠成と幕府の要職につき、五万石まで石高を増やし、駿河国東郡で重きをなす藩となった。幕末期、海防問題が起り、忠寛の時代には下田固役、忠誠は老中に任じて幕政運営に関与した。

忠敬のとき慶応4年7月13日上総国市原郡菊間に転封された。

岡田家系図

初代九郎兵衛重直（宇喜多藩士、慶長8年刈谷城主水野隼人正源忠清公家臣）－二代庄助重政（水野藩士）－三代庄助重芳（水野藩士）－四代庄左衛門重房（松本御大変、水野藩士⇒浪人）－五代程八重只（浪人）－六代庄助重兼（浪人）－七代伴助重則（浪人、寛政6年没）－八代弥助重猶（水野忠友、忠成の沼津五万石栄進で帰参かなう。浪人から再び水野藩士へ、天保7年10月没）－九代程八郎（程八重勝、明治3年9月上総菊間へ）－寅三郎－茂生－昭男（平成16年没）

一般に、掛け軸は床の間を持たない住宅が多くなっている最近では掛け軸への関心とともに、その価値が低下している。有名な画家の掛け軸でもここ十年の間に驚くほど価格が下がっている状況である。

従って特に揮毫者や内容が歴史的な事件に関わるものでなければ評価されず、単に大名の書というだけならばあるいは、たとえ天皇の書であっても市場価値は低いといわれている。

ただ、本軸の場合、不白流のお茶人にとっては水野家の茶頭を不白が務めたことで評価されよう。

元禄から化政の頃、利休がわび茶を完成したが時代に合わせて茶道を町人にも普及させるべく表千家7代如心斉（1705～1751）は高弟の川上不白らとともに七事式という指導方法の改革を行った。川上不白

岡田家掛け軸「雀」について

羽州四本、忠義の落款から駿河沼津藩五万石水野家第三代当主、水野出羽守忠義の書であると考えられる。

水野出羽守忠義（寛政4年～天保13年（1792～1842））は天保5年(1834年)4月13日42歳で襲封し、天保8年12月16日「四本」となる。天保13年1月19日、病のため51歳で卒去していることから、書は40歳代後半に書かれたと推測される。

因みに「四本（しほん）」は、大名に与えられる官位で従四位下のこと。従って、天保8年以降の書か。軸の長さは約75ｃｍ程あり一般家屋の床の間に飾るのは窮屈なくらいの大幅である。

「雀」は、カク、かたい・うつ

冂（どうがまえ、けいがまえ：下方が開口したかまえ）と隹（すい）とに従う。「高く至るなり。隹（すい）の上りて冂（けい）を出でんと欲するに従ふ」というのは高飛する鶴を背景に置いた解釈。隹（とり）が高飛しようとしてどうがまえの冂の形に遮られる形、隹（鳥）を確く執らえてその奮飛を防ぐ意。（白川静「字統」抜粋）

雀然は、高く飛ぶ意。（白川静「字通」抜粋）

本軸は、本来「雀」と「亀」との二幅対の一方であるとの岡田家の言い伝えから、鶴を意味すると考えられる。

駿河沼津水野家

水野隼人正忠清（徳川秀忠に仕える。初代松本藩主、初代沼津藩主、家康の生母於大はいとこ）－忠職－忠直－忠周－忠幹－忠恒（享保10年江戸城松の廊下で刃傷沙汰、改易）－忠穀－忠友

初代忠友（享保16年生、家治の信任厚く老中職、三万石）－二代忠成（宝暦12年生、家斉に信頼され老中、五万石）－三代忠義（寛政4年生、天保13年没）－四代忠武（文政7年生）－忠良（天保5年生）－忠覚（文化4年生）－忠誠（天保5年生）－忠敬（嘉永4年生、明治元年上総菊間藩に移封）－忠亮（明治7年生）－忠泰（明治37年生）－忠和（昭和11年生）－忠知（昭和41年生）

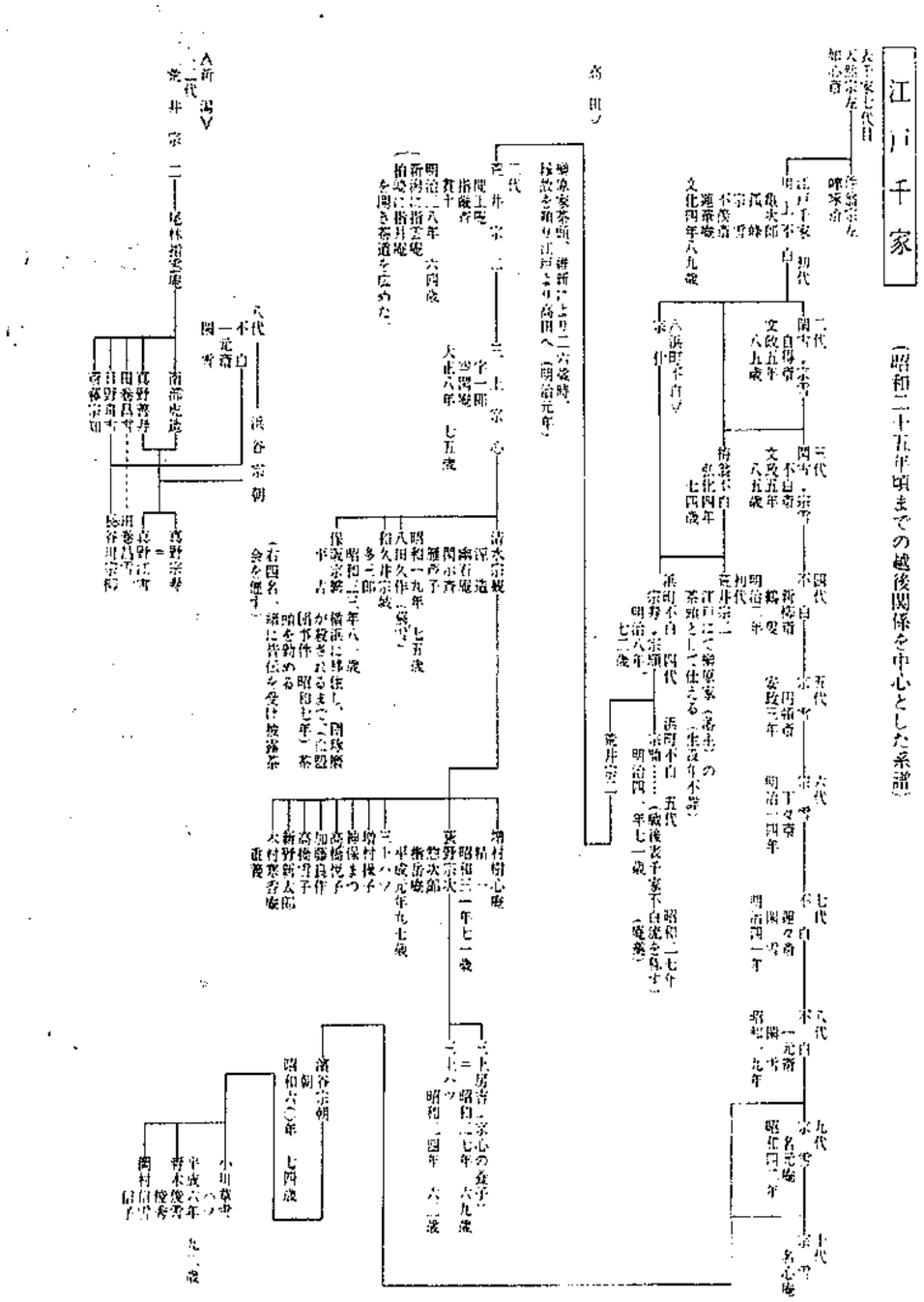
水野忠恒の刃傷事件（松本御大変）

水野忠恒（元禄14年8月6日（1701年9月8日）－元文4年6月28日(1739年8月2日)）は江戸時代の大名。信濃松本藩代6代藩主。沼津藩水野家6代。

4代藩主水野忠周の次男。母は前田利明の娘。正室は戸田氏定の娘。官位は従五位下、隼人正。

本来藩主になる予定が無かったため、日頃から酒色に耽っており、みだりに弓矢を射ったり鉄砲を撃つなどの奇行がたびたび見られたという。ところが享保8年（1723年）に兄の水野忠幹が嗣子なく没したため、遺言により松本藩主に就任する。藩主になってからも相変わらず酒に溺れて狩猟ばかりし、藩政は家臣任せだったという。享保10年（1725年）、大垣藩主戸田氏長の養女（戸田氏定の娘）を娶り、その祝言を行なった翌日の7月28日、征夷代将軍徳川吉宗に婚儀報告をするため江戸城に登城して報告を済ませる。その後、松の廊下ですれ違った長府藩世子（後に7代藩主）の毛利師就に対して刃傷沙汰を起こしてしまう。忠恒は不行跡が多く、家臣に人気がないので、自分の領地が取り上げられて師就に

江戸千家・不白流の茶譜（文献３．平丸誠著「上越の茶の湯」より）



は如心斉の意向に沿って江戸へ移りこの普及を図った。

沼津藩二代水野忠成（タダアキラ）は、川上不白の門弟で有名な茶人である。この川上不白の孫で梅翁不白は沼津水野候の茶頭となる。梅翁不白の弟子の初代荒井宗二は江戸で榊原候の茶頭となり、二代荒井宗二は新潟、柏崎で茶道を広めた。不白流はさらに三上宗心ー清水宗観と継承され高田で普及された。

岡田家掛け軸の補修

1．掛け紐取付け鐶

取付け鐶の一方が外れかかっていた。⇒直す。

鐶の根本の座金上の飾りが無かった。⇒そのまま。

2．紐

掛け軸と時代的に合う紐があればと手持ちの掛け軸を取り出し、現状の紐に近いものを探したが寸法的に適したものが無かったため、新しい掛け軸用紐を付けた。

3．掛け軸を広げてみると一部剥がれている部分がある。⇒そのまま。

4．箱なし⇒簡易箱（ボール紙）

以上１～４は、上越市遊心堂で確認・補修

＊掛け軸の取り扱い（紐の巻き方、軸の掛け方等）：　←　参照検索　YaHoo＞掛け軸の取り扱い

参　考

1．八幡公民館主催事業「八幡史学館」、平成24年7月1日山岸弘明氏講演会資料

原典は、千葉県文書館寄託、岡田家文書

2．菊間藩士岡田程八日記ーある水野藩士の生活記録、沼津市立駿河図書館、昭和57年3月刊

3．平丸誠著「上越の茶の湯」、北越出版、平成9年3月刊、

大日本茶道発会主催、平成9年度茶道文化学術奨励賞を受賞。

4．静岡県史　通史編４　近世二、静岡県、平成9年3月25日刊、水野家の詳細は第三節沼津藩の再置参照。

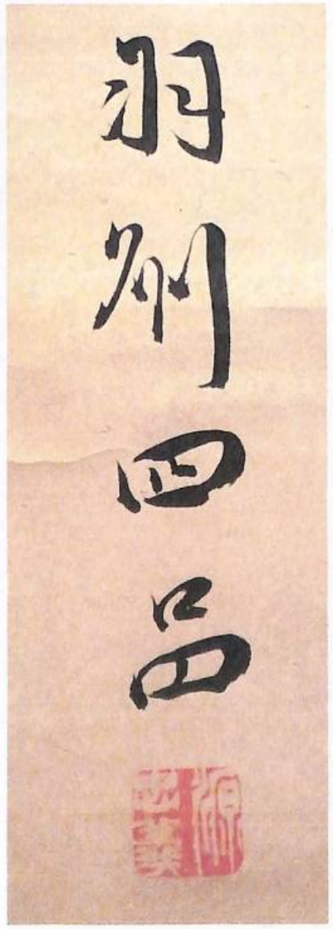
その他

岡田家は沼津水野家に従い市原市菊間に移り住み敷地内には最近まで殿さま拝領の家がありました。残念ながら詳しい調査をされないまま解体されました。井田晃の叔母は岡田昭男氏に嫁ぎまた岳父加藤良作（上越市高田、茶道具商・遊心堂）は幼少時から不白流のお茶を学んでおり上記清水宗観の門弟の一人であること、文献３は加藤良作の口述を基に作られ、大日本茶道学会主催の平成９年度茶道文化学術奨励賞を受賞し、著者共々表彰式に出席したことを付記します。

謝　辞

新潟県上越市はお茶が盛んなところであり、掛け軸補修をお願いしたアートサロン遊心堂、深田正明氏は不白流に連なる沼津水野氏に造詣が深く、多くの資料の提供その他ご教示を頂いたことを記し感謝の意を表します。

平成24年9月19日　　井田晃記



川上不白と水野家

川上不白は享保四年（一七一九）、紀州新宮に水野家の家臣川上家の次男として生まれた。水野家は紀伊藩江戸詰家老職にあり、江戸に仕官した不白は、十六歳の時に主君の指示により、水野家茶頭職になるために表千家七代如心斎の元で修業を続けた。

茶の湯は当時、社交接待、稽古事として大衆化の時代に入り始めていたが、不白は師如心斎から茶の湯のあるべき姿を学んだ。延享二年（一七四五）、如心斎より茶湯正脈が授与され、寛延三年（一七五〇）には真台子が伝授された。

江戸に帰府した不白は、水野家茶頭職としての活動を始め、江戸の武家社会に千家流の茶を伝えた。現在、各地に江戸千家の茶が伝承されているのも、当時江戸に集る大名やその家臣により不白の茶が受け入れられ、各々の国に持ち帰られたことによる。

安永二年（一七七三）、五十五歳になった不白は嗣子自得斎へ水野家茶頭職の家督を譲る。京都修行時代に師から授かった「宗雪」の安名を自得斎が名乗ることになり、この時以後、やはり京都修行時代に玉林院大竜宗丈和尚より授かった「孤峰不白」と名乗る。

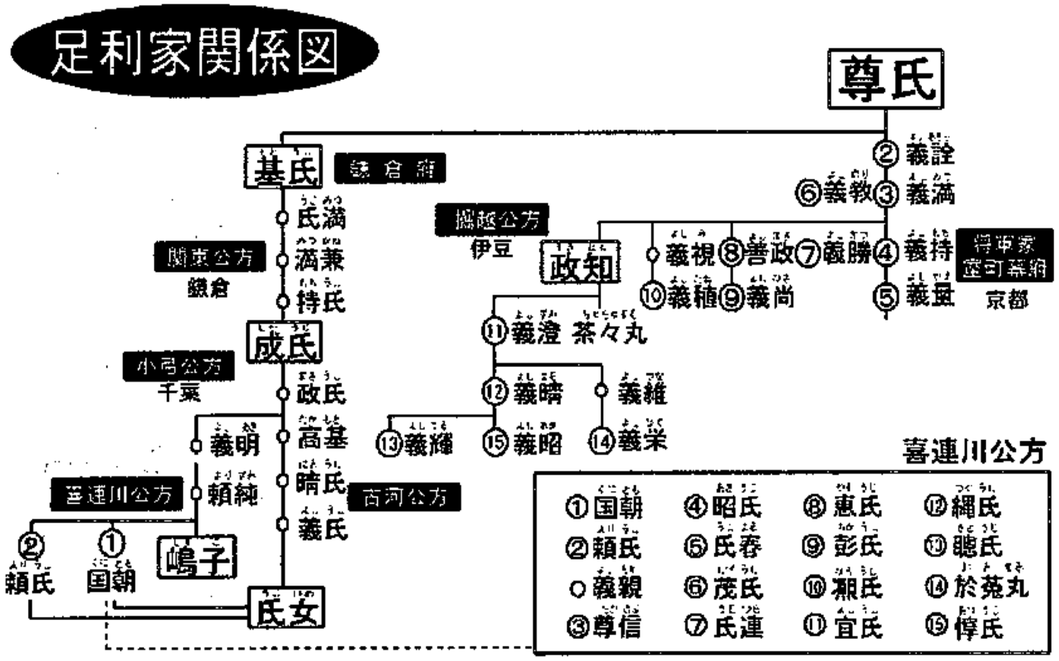
不白は活躍の場をさらに広げ、江戸の町人文化の影響を受けながら、京都とはまた違った江戸前の茶風を作り上げ、江戸の一般庶民の間にも広めていった。

不白は当時としては九十歳という稀にみる長命でありながら、文化四年（一八〇七）に没するまで活動し、長寿茶人としても幅広く人気を博した。今日、晩年に集中する数多くの遺墨ほか茶碗、茶杓等の遺作からも不白の人物像が浮かび上がってくる。

不白は生前に自ら菩提所とした谷中の日蓮宗安立寺に葬られている。以後、安立寺には、不白の子孫、川上姓を名乗る高弟、親族の墓が立ち並び今日に至る。

因みに、紀州新宮水野藩祖水野重央は、初代沼津藩主水野忠清とはいとこに当たる。

江戸千家不白会会報、96 号流祖川上不白二百遠忌を迎えて、「川上不白略伝」より(ウェブ情報より)



元禄 16 年　　4 代昭氏のとき、江戸藩邸

初代榊原式部大輔康政　　喜連川河内守善親
9 代榊原式部大輔政永　　喜連川左兵衛督彭氏

＊喜連川氏については、山下昌也著「小さな大大名」、グラフ社、平成 20（2008）年 10 月

鎌倉公方（くぼう）から古河公方そして喜連川公方へ・・・

足利尊氏は京都に幕府を開くとともに、次男基氏に関東十カ国を与え、鎌倉を拠点として鎌倉府を開かせた。鎌倉府の長官は鎌倉公方（関東公方）と呼ばれ、関東管領上杉氏に補佐され関東の政務を主導したが四代持氏（もちうじ）は将軍義教と対立し、管領上杉憲実（のりざね）にも離反され、永享十一年（一四三九）鎌倉公方家は滅亡した。その後、関東諸将の要望により持氏の子・成氏（しげうじ）が鎌倉公方として復活したが、上杉氏の支持を失い、古河に移り古河公方と称された。

古河公方家は、初代成氏から五代義氏まで命脈を保ったが、天正十年（一五八二）義氏は九歳の氏女（うじひめ）を残して没し、一二八年間続いた古河公方家は断絶した。

一方、古河公方二代政氏の次男義明は、下総小弓城にあって勢威を振い小弓（おゆみ）公方と称された。義明は国府台（こうのだい）の戦において討死したが、三男国王丸と二姫は安房館山の里見氏に保護された。国王丸は成人して頼純（よりずみ）と名乗り、その娘・嶋子は縁ありて喜連川塩谷氏十七代惟久（これひさ）に嫁ぎ、美貌の城主夫人として名声が高かった。

天正十八年（一五九〇）豊臣秀吉は小田原城攻略に際し、関東の諸将に参陣を命じたが、惟久はこれに応じなかったために秀吉の怒りに触れたと察知し出奔、惟広以来十七代四百年続いた喜連川塩谷氏は滅亡した。

その際、惟久夫人嶋子は宇都宮に陣した秀吉を訪ね、惟久に二心ないことを弁明し許しを請うた。好色家の秀吉は美人の嶋子を寵したため喜連川三千五百石を嶋子の化粧料としてこれに与えた。

また、秀吉は古河公方家の断絶を惜しみ古河公方義氏の遺子・氏女（うじひめ）に嶋子の弟国朝を配し、古河公方家の再興と嶋子が化粧料を国朝に譲ることを認めた。

国朝は秀吉の朝鮮出兵に応じ出陣の途次安芸国において急死したため、秀吉は国朝の弟頼氏（よりうじ）と氏女をめあわせ襲封させた。

頼氏は喜連川に居館を定め「喜連川」を氏としたため「喜連川公方」と尊称された。

江戸時代、徳川幕府は、喜連川氏を足利将軍家の後裔の中で、唯一の大名として格式十万石・実高一万石、特権十六ヵ条を与え優遇した。

今においても、喜連川町民の誇りは、足利氏ゆかりの城下町にあります。

（喜連川町誌参考）

とりわけて親密となった。しかもその檀那の一にはやはり喜連川氏があるということはいよいよ円覚寺と足利氏との深い因縁を思わせるものがある。

「月桂寺起立由緒の覚書」によれば、

一雪山和尚代、寛文三葵卯年の比、洞家の老宿別傳宗分、依官難子細有之、
致改派、法係を雪山ニ嗣、居住之江戸深川惠然寺共ニ、月桂寺之末寺と成候、
別傳之法嗣一翁、同時に致改派、小日向徳雲寺も末寺と成り、
其後惠然寺末寺法身寺又末ニ罷成候、又明暦二申年、武州小川新田小川寺、
江戸青山久保町實相寺も月桂寺末寺ニ罷成候、右雪山代、
惠然・徳雲・小川・實相之四ヶ寺、月桂寺之直末ニ属候、其後葛西祥雲寺、
大阪東高津村妙中寺、惠然寺之末寺ニ属し、武州秋山村直正寺、
徳雲寺之末寺ニ属し候而、右之四箇寺月桂又末ニ罷成候、

とあり、月桂寺の末寺に惠然・徳雲・小川・實相の四寺があることを示している。

（参考）
玉村竹二、井上禅定執筆、圓覚寺史、春秋社（一九六四年十二月）

因みに、室町幕府から東国の支配を任されていた関東府政権は、鎌倉の寺院精力を傘下に置き、その宗教的権威を支配に利用していたといえ、鶴岡八幡宮や禅宗寺院である建長寺、円覚寺も中心に位置付けられるとともに所領の寄進が諸役免除の特権が与えられていた。円覚寺は北条時宗の開基になり、夢窓疎石も第十五世住持となっている。

関東十刹（じっさつ）―五山十刹とは、鎌倉時代末期頃、禅宗の保護と管理のために京都と鎌倉に格式の高い五つの寺を定めたことに由来する。さらにそれに次ぐ寺格の十刹が定められた。因みに、室町時代以後、鎌倉五山とは、建長寺・円覚寺・寿福寺・浄智寺・浄妙寺をいう。

月桂寺は市ヶ谷河田町にあり、防衛庁の新宿寄り、女子医大裏手の辺りにある。五代将軍綱吉の側用人柳沢吉保の両親、吉保を除いた一門の墓所があり、吉保の父の院号に因んで山号を正覚山という。吉保の二千七百坪余りの寺地寄進を受け敷地は約五千坪に達し、一方で喜連川氏の基となった島子が雪山に帰依したことにより、足利氏との由緒が生じ、これを背景に関東十刹に列せられるとともに円覚寺と親密な関係を持つ寺院となっていった。残念ながら堂宇やその他文書や寺宝は昭和二十年四月十日の空襲により悉く焼失してしまった由。

寺の言い伝えでは、島子は与えられた扶持の半分を寺に寄進したとのこと。また、月桂寺は小川寺と月桂寺は、施餓鬼法要等を通じて交流を持っているそうである。

四、月桂寺について

小川寺梵鐘の第一区池の間には、「多麻郡小川村醫王山小川禅寺者江府月桂禅院之末裔也」すなわち、多麻郡小川村、医王山小川禅寺者（は）江府月桂禅院之末裔也、とあり、具体的には臨済宗円覚寺派月桂寺の末寺であることを示している。たとえば円覚寺と月桂寺、月桂寺と小川寺のような関係を本末関係といい、江戸幕府が中央集権化を進めるための政策の一環で、これにより本寺の支配権強化と法脈相承の明確化を図るものである。月桂寺は他の四ヶ寺（惠然寺、徳雲寺、實相寺、清水寺）とともに円覚寺の末寺であることが示されている（「僧録官記」萬治三年（一六六〇））。

月桂院は、円覚寺中興の師天甫碩圓の門人関叔碩三が寛永九年（一六三二）に市ヶ谷稲荷屋敷に平安院を開設したのが起源で後にその地が外濠となるため市ヶ谷奥地（河田町？）の替地に移った。その後関叔は寺を弟子雪山碩林に譲った。一方喜連川頼淳の女島子（月桂院殿龍室玄珠大禅定尼）が雪山に帰依し、同院の檀越（檀那）となり、慶安五年（一六五二）七月、喜連川よりの申請によるものか、幕府から百石の寺領を受け、幕命により平安山月桂院と改称し、寛文五年（一六六五）には将軍綱吉から百石の朱印状を受けている。雪山は貞享四年（一六八七）正月元日に逝去した。その後席を一時門人の乾山惠龍が継いだが、同年九月十二日相次いで亡くなり、同門の碧雲が後住となったが、雪山死後五日、柳澤吉保、その父（正覚院殿）追薦のため、寺内に祠堂を建立し、ここに柳澤家も同寺の檀越（檀那）となった。その六年後、碧雲は不行跡のため、寺社奉行より追放を命ぜられ、除籍されて法系は断絶したが、前住雪山の門人別傳宗分（碩分ともいう）より一翁碩鴬を経て傳法をした一睡碩秀が入院（元禄五年十二月十六日）し、柳澤吉保は南隣の地二千七百十四坪を境内地として寄進し（本来の境内地二千三百二十九坪は、外濠を掘るため移転の際、幕府より寄進されたもの）、一躍二倍の寺地になり、同七年には方丈、庫裏、書院、寝室、衆寮、表門、塀を造営し、柳澤家の祠堂を惣檀の祠堂とは別に再建した。同年、一睡は当寺が足利氏の由緒が有り、また当代からは御朱印を受けているから古例に準じて、「十刹」の官寺に列せられるよう柳澤吉保と僧録司乾巌元雄とに願い出で、両人の吹嘘を請うた。その結果同年七月二日に、十刹に準ぜられた（円覚寺にその際の朱印状が現存する）。そして三度改称して正覚山月桂寺となった（以上「月桂寺起立由緒の覚書」峻道碩隆編）。正覚は吉保の父安忠の院号である。

このように、法系からいえば円覚寺中興天甫の直系であり、位置は江戸市中にあり、檀越は当代幕臣の棟梁でしかも仏教の理解者を自ら任ずる柳澤吉保である。その上、寺格も、わざわざ中世のことを思い起こして復古の儀を以て、十刹に追加列位されたのである。それが慶安四年（一六五一）正月には、円覚寺末寺として、足利家旧由緒寺院の一に加わり、公儀年禮に将軍家に対して獨禮を勤める寺院になっている。即ち明らかに末寺になっているのである。以上のような諸条件を備えた月桂院を末寺に収めた円覚寺は、今後その末派の中心的存在として、有力な基盤となり、歴代住持のうちからも、円覚寺の住持に昇住するものも続出し、新たな本末の関係でありながら、

四―一、雪山碩林について

円覚寺中興の師天甫碩圓の門人関叔碩三が寛永九年（一六三二）に市ヶ谷に平安院を開設し、これを引き継いだ弟子の雪山碩林に、足利氏の血をひく島子が帰依し檀那となった。雪山和尚は貞享四年（一六八七）に亡くなるが、その間月桂寺に属する末寺も増え、明暦二申年（一六五六）武州小川新田小川寺も末寺となった。また、慶安五年（一六五二）七月、幕府から百石の寺領を受け、幕命により平安山月桂院と改称した。

雪山の死後まもなく柳澤家も月桂院の檀那となり、元禄七年に正覚山月桂寺と改称するとともに十刹に列せられることとなった。因みに正覚は吉保の父の院号である。

月桂寺の墓地の左手奥には、よく開山僧に用いられたという、卵塔（らんとう）（無縫塔（むほうとう）ともいう）と呼ばれる八角形の台座の上に上部が丸みを帯びた永い卵形の塔身を載せた禅宗僧侶のお墓があり、簡素ながら重厚な印象を受けた。この台座の右手前側面には「当寺開山前住圓覚」、正面に「雪山和尚」、左手前側面には「大禅師之墳（塔）」と三面に刻まれている。因みに後ろ三面には、「師諱碩林號雪山武州金澤人姓平氏三／浦嗣法於関叔貞享四年丁卯孟正朔旦／示寂正壽七十二塔全身于月桂西北隅」と刻されている。

小川寺梵鐘第一区池の間には、次の文言が刻まれている。

即今雪山碩林為開山祖可詣衆病悉除信心安楽之霊場也、

目下、雪山碩林は開山祖と為し、詣衆病悉く除くべき信心安楽之霊場也とあり、以上より、月桂寺開山の雪山和尚が小川寺の開山でもあったことが分かる。

さらに、小川寺梵鐘は雪山和尚の亡くなる前年に造られたことが分かった。

四―二、島子（嶋子）について

月桂寺墓地の中央に足利の血を引く笠付の墓石がありその正面には、

> 今茲明暦元年乙未六月十七日寿八十八歳
> 月桂院殿龍室宗珠大禅定尼台霊
> 関東公方末葉左兵衛督源頼淳公嫡女也

と刻まれている。島子は明暦元年（一六五五）に八十八歳で亡くなったことおよび関東公方末葉左兵衛督源頼淳公嫡女であることを示している。

ここで、「左兵衛督（さひょうえのかみ）」は歴代の関東公方家が称してきた官途（かんと、官吏の地位）名であって、頼淳は小弓公方足利義明の子で、一時安房里見氏の庇護下にあったが、豊臣政権により取立てられ、男系が絶えた本来の関東公方の血を引く氏姫と島子の兄である国朝が結婚して関東公方家を存続することになった。頼淳は、天正十八年増田長盛への書状で、自ら「左兵衛督」を名乗り、関東公方の後継者であることを主張した。墓石の戒名の上方には五七桐花紋が示されている。

室町幕府は足利尊氏により開かれ、関東地方を治めるため、鎌倉府を置き尊氏の四男の基氏が鎌倉公方となり、代々世襲したが、四代公方持氏のとき永享の乱が起き、自害し、遺児はその後成氏として第五代鎌倉公方となるが、本拠を下総の古河に移し、初代古河公方となった。二代政氏は息子三代高基との不仲で対立し、このとき僧籍にあった高基の弟は還俗して足利義明を名乗り、里見氏の後ろ盾を得て小弓公方として独立した。義明の孫が島子であり、父は小弓公方二代頼淳である。

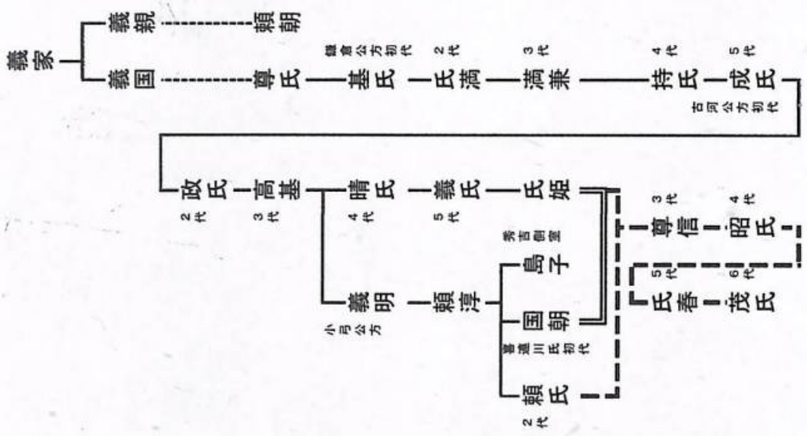
一方、関東公方は五代義氏の長男が早世のため絶えようとしていたとき、島子の弟の国朝は、天正十八年庚寅（一五九〇）九月豊臣関白により義氏の娘氏姫と結婚し、古河公方家を継ぐよう、古河に移るよう命じられるとともに喜連川に四百貫の地を与えられた。

喜連川の名族塩谷安房守は天正十五年に島子と結婚したが、小田原攻めの秀吉に伺候の機会を逃し出奔してしまった。その後挨拶に行った島子を秀吉は気に入り、側室にしたが、前述のように関東公方・喜連川氏の再興には島子の影響が少なからずあったようで、豊臣政権による小弓公方家取立という政策の一環として、島子の秀吉側室化があったとすることを適切とする見方がある。

室町幕府の組織は京都と関東の二重権力構造を助長し、関東においては鎌倉以来の地方豪族、上杉管領、後北条氏、武田氏、長尾氏、今川氏等群雄割拠し、応仁の乱に先立って混乱状態（享徳の乱）に突入し、鎌倉公方家もその渦中にあって古河公方、小弓公方と分裂をしていったといえる。

江戸時代においても、かつて将軍家であった足利氏の伝統を重んじた徳川家康は、石高四五〇〇石の足利頼氏に十万石の家格を与え、喜連川家は、参勤交代の免除（「国勝手」）や諸役免除の特権が与えられた。

関東公方から喜連川氏までの系図



左図は、江戸時代の切絵図である。
不忍池のほとり、上野の対岸に、喜連川左馬頭が見える。

喜連川藩は小藩であり、江戸屋敷を池之端に持ったのは元禄十六年（一七〇三）でありそれまでは、月桂寺を宿としていた。
写真は、月桂寺にある島子のお墓である。

（参　考）

喜連川町史第三巻、さくら市市史編さん委員会（平成十九年三月三〇日）。
学校教材史料集第5号、平成二十一年栃木県文書館。
山下昌也著、日本一小さな大名、グラフ社、平成二十年十月六日発行。
阿部能久著、戦国期関東公方の研究、思文閣出版、二〇〇六（平成十八）年二月二十五日発行。
月桂寺（東京都新宿区河田町二ノ五）

右の喜連川町史第三巻資料編5喜連川文書は、上、下巻有り、特に上巻には、喜連川氏成立に係る秀吉朱印状や頼淳が秀吉への取成しを依頼する増田右衛門尉長盛への書状などが含まれている。

四―三、医師小川東磻について

喜連川町史第六巻、第七章、二医術交流において、

「明和四年四月　小川東磻喜連川茂氏診療日記」

が掲載されている。（小平市中央図書館所蔵小川家文書T―3　1）

これについての「解説」を紹介する。

小川東磻は、武蔵国多摩郡小川村（東京都小平市）の名主弥次郎のことで、明和四年（一七六七）頃に隠居し東磻と号した。名主の頃から医療を行なっていたと思われる。喜連川家との関係は、同家と縁が深い江戸市ヶ谷月桂寺を媒介したものと思われる。小川家は同村の開拓名主で、初代九郎兵衛は開発早々に月桂寺の住職を招いて小川寺の開山としている。その以前から小川家と月桂寺との関係はあったと思われるが、いずれにしても同寺を仲立ちとして、東磻と喜連川家との関係があった。

日記中、大御所とあるのは喜連川茂氏、若御所（金王丸）は同恵氏のこと。茂氏には、御手医衆として四人の医者が近侍していた。秋元（山）浦庵・宮脇雲悦・皆吉流碩）・酒井知宅である。下腿の浮腫が重症であったか。東磻は、権威ある存在として茂氏の病状を診察し、薬種を指示してその調合を促し、服用させた。風呂好きの茂氏へ巧みな入湯をさせている。この日記の終わりからおよそ一月、明和四年五月十五日に、茂氏は六六歳で病没した。この日記の記述で秀逸なのは、城山（丸山）からの眺望、御所家内庭の美観である。旅館に当てられた駿河屋（作右衛門）は、恵氏時代に酒造業で名を博した。ちなみに、東磻の墓誌には「東磻得医術、聞州郡、忝加喜連川家近侍之列」と有り、喜連川家から扶持を支給されている、とある。

小川東磻と喜連川家を結びつけた要因として月桂寺の存在を挙げている。

また、小川東磻に関して

「小平の歴史を拓く（上）―古文書目録解題編」小川家文書目録十九頁、

（史料4）乍恐以書付奉願上候（寛保三年（一七四三）三月）において、名主弥次郎（後の東磻）が病気等の理由で弟に名主を譲りたい旨の願いを提出したものの諸般の事情で交代の時期は明和四年（一七六七）頃になったことの説明がなされている。

さらに、同書五七頁から五八頁に、

⑥　医者小川東磻と喜連川藩、において、喜連川藩の成り立ちとともに医師小川東磻が喜連川藩第六代茂氏の治療に関与したことが示されている。ここでは、小川東磻と喜連川藩の関係要因として月桂寺には言及していない。

（参　考）

喜連川町史　第六巻（通史編一）、さくら市市史編さん委員会（平成十九年三月三〇日）。

小平の歴史を拓く（上）―古文書目録解題編、小平市中央図書館、平成二十一年三月三十日

あとがき

私は、定年後の趣味にと千葉市の古文書講座へ一年ほど通ったとき、親戚関係を子供たちのために明らかにしたいという叔父の事業に参加した。本家は小川三番の竹松善市家で江戸に来る以前は、信州であるとの家伝があり、叔父から伝えられた先祖の地、伊那市富県の竹松集落が偶然大学の恩師の出身地の隣の部落であったことが、先祖調査の推進力となり、小平市中央図書館の方の教唆を得て「コラム、私の家系図調査」（小平の歴史を拓く―市史研究第二号）という成果を得ることが出来た。

本報告は、その続編ともいえるもので、小平市小川の竹松家の檀那寺である小川寺の梵鐘に係る事柄を本年三月以降調査を開始し、まとめたものである。

宗門人別帳や墓石に依って先祖を調査したが、さらに時を遡って製作時が明らかな梵鐘に「武松惣兵衛」が刻まれていることに注目し、銘文の意を把握しようと試みた。

梵鐘に小川寺の本寺として刻まれた月桂寺には、喜連川氏創設に影響を与えた島子の墓が有り、私が栃木県塩谷郡喜連川（現さくら市）生まれでかつ現在小弓公方に係る千葉市に在住のことも強い関心を持って調査した理由である。

昨年、叔父と富県を旅行する計画が持ち上がり、可能なら恩師寺澤一雄（阪大名誉教授）先生のお墓へのお参りをしたいとご遺族へ連絡をとった。実際には墓参はできなかったが、本年十一月二十日、西宮市浜甲子園のご自宅で近親者で営まれる二十三回忌に招かれ暖かくお迎えいただいた。

私の周囲でいくつもの偶然を見た幸運な先祖調べはこれで完了とする。

調査に当たっては、浅学非才のため、いくつかの壁に遭遇したが、多くの方のご指導を受けかつ出版物を参考にさせていただいたことを記し感謝の意を表します。

平成二十二年十一月吉日　　井田　晃

（千葉市稲毛区黒砂二―二―五）